

芸能

ENTERTAINMENT



「珍しい演目をやれるのは幸せ。自分のレパートリーとして語り続けたい」と話す英大夫

豊竹英大夫の「人間詞長者気質・持余屋の段」

あす、大阪・国立文楽劇場

文楽大夫の中堅実力派、豊竹英大夫が、7日午後2時から大阪・日本橋の国立文楽劇場で開かれる「文楽素浄瑠璃の会」で、本公演では上演されない稀曲「人間詞長者気質・持余屋の段」を勤める。「笑いの多い楽しい曲です。こういうものも時に上演して、浄瑠璃の間口を広げたい」と英大夫は話している。

タイトルの「人間詞」とは、意味を反対に言う言葉使用のことで、狂言にも同じ人間詞を使った「人間川」という演目がある。その人間詞を使う持余屋の主人公が主人公の喜劇味あふれる作品だ。

持余屋は商売が軌道に乗り、財産が増えるばかり。商人としては儉約すべきところだが、主人の長者兵衛は、店の者に浪費を勧め、堅物の息子には無理に廓通いをさせる始末。ところがある夜、盗賊が店に押し込んできて……という展開。

「全編、『笑わしたる精神』で作られた曲やないかと思えます。ですから昔は

浄瑠璃で「笑わしたる」

お座敷芸といつか、いろんな古典の浄瑠璃を聞き飽きたお客さんの前で語って楽しんでた浄瑠璃でしようね」と英大夫。

もちろん今回が初役。30年ほど前にNHKのラジオ用に演奏したことがある豊竹鳴大夫の稽古を受け、鶴澤清介の三味線で挑む。

落語の「明烏」や「高津の富」を思わせる展開があったり、文楽の「新版歌祭文」のお染のサワリのパロディーがあったりと、古典芸能なら思わずニヤリとする場面も。

「こういう作品には、大まじめに古典のチャリ(滑稽な場面)をやる難しさがあります。町人の世界を舞台にした世話物ですので、お客さんに、当時の大阪の町にタイムスリップしたみたいな感覚に陥ってもらえればうれしいですね」

「素浄瑠璃の会」では、ほかに、竹本住大夫・野澤錦糸による「義士銘々伝・弥作鎌腹の段」、豊竹咲大夫・鶴澤燕三の「源平布引滝・九郎助住家の段」を上演する。国立劇場チケットセンター ☎ 570・07・9900。